

鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』の類書的性格について―蔡琰の琴の故事の引用から―

陳 坤

はじめに

周代から明清時代に至るまで、『史籀篇』、『千字文』、『蒙求』、『三字経』、『幼学瓊林』等、様々な伝統的啓蒙書が編集された。その中でも『幼学瓊林』は、中国の啓蒙教育が発展を遂げた明清期に成立した、集大成と称しうるものである。本書は成立後、清朝期を通じて広く世に普及した。民国期に至つてのちも、『再増国語注解幼学故事瓊林』¹⁾のような続本が出版されている。近年は伝統文化の伝承を担うものとして受け止められており、「伝統蒙学叢書」、「国学經典規範読本」等の叢書にも収められ、刊行し続けられている。²⁾

『幼学瓊林』がこのように広く歓迎を受けた理由としては、内容の豊富さ、語句形式の自由さ、駢偶の文体、部立による類書の体裁等、様々なことが考えられる。とくに『幼学瓊林』の類書的特質については、先行研究及び『幼学瓊林』諸本の刊行時の付言等にも指摘されているところである。たとえば、一九八六年に岳麓書社より出版された『幼学瓊林』では、喻岳衡の前言が本書の特色を説明する際、検索の便を有する類書的特質を指摘している。³⁾ 但し、その解説は概説的であり、『幼学瓊林』の伝本に基づく全面的な検討には至っていない。また、王丹『幼学瓊林』研究⁴⁾においては、『幼学瓊林』の内容及び形式について検討しており、『幼学瓊林』の分類の特徴として、伝統の類書を継承していること、また一方では兵部、楽部等の部立や内容の削除を以て分量の軽量化を図っていること等の指摘がある。但し、『幼学瓊

『林』の伝本の一つである鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』では、楽部はないものの、蔡琰の琴の故事のような人口に膾炙する音楽故事が多く取られている。『幼学瓊林』の部立の特徴は諸伝本の内容に基づいて検討する余地がのこされているだろう。

本稿は『幼学瓊林』の伝本のうち最も通行している鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』に基づいて考察を行う。主に本書に見える蔡琰の琴の故事を手がかりにして、その注釈内容と部立の構成の特徴を考察し、本書の編纂姿勢と類書性格を検討する。また本稿は、本書の特質が「博」と「要」にあると考える。この「博」と「要」という性格と、中国の伝統類書に見える中核思想との繋がりについても検討する。

一 祖本『幼学須知』と鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』の成立

『幼学瓊林』は、成立刊行以来、広く普及しており、その伝本の撰者、書名は多岐にわたっている。そのため、もともとの書名と編纂者については、不明なところが多い。但し、通称の『幼学瓊林』は、明末の程登吉（程允昇）の『幼学須知』を祖本にし、清の鄒聖脈により『寄傲山房塾新增幼学故事瓊林』として乾隆二十五年（一七六〇）に成立したと考えられる。⁵⁾ 程登吉（一六〇一〜一六四八）は、字を允昇といい、郷塾の教師を担当した学者でもある。⁶⁾ 鄒聖脈（一六九一〜一七六二）は、字を宜彦、号を梧岡という。布衣の学者として、書籍の復刻の業にも従事しており、『幼学故事瓊林』に冠せられる寄傲山房はその家屋及び復刻の坊の名称と言われる。⁷⁾

祖本『幼学故事瓊林』とその祖本の系統については、李莉「『幼学瓊林』作者、成書及版本考」⁸⁾と前述した王丹の論文に考察がある。たとえば、王丹は、『幼学須知』を祖本とする版本を、『幼学須知直解』、『幼学須知句解』、『幼学故事瓊林』、『新增幼学故事珠璣』、『幼学求源』、『精注雅俗故事読本』、『増補幼学尋源』の七つに分けている。以下、先行研究と筆者の収集した文献資料に基づいて、祖本『幼学故事瓊林』とその祖本の系譜と成書の概要を整理してみる。

1 『幼学須知』の文献記載

『幼学須知』の記載については、早期の文献目録には、宋の陳振孫『直齋書録解題』に『幼学須知』五巻がある。その解題には、宋の孫応符が世に伝わる小学の教科書を増訂したものである。明初の記録には、楊士奇等編『文淵閣書目』に『幼学須知』一部一冊(闕)、葉盛『棗竹堂書目』に『幼学須知』一冊も見えるが、共に撰者名が記録されていない。また、明初の張九韶『群書拾唾』自序文では古今の名物の書を紹介する際、『幼学須知』の書を百家の編としても取り上げている。つまり、明末の程允昇『幼学須知』の成書の前に、『幼学須知』という書が既に存在したことになる。但し、これら諸本の状況は不明であり、宋の孫応符による『幼学須知』、明初の『文淵閣書目』に見える『幼学須知』等と明末の程允昇『幼学須知』との関係は不明である。

2 明の程允昇『幼学須知』の成書

程允昇『幼学須知』の成書の詳細については、不明なところも多いが、所見の現存本の最古の序刊本である程允昇の崇禎十年（一六三七）の序によれば、この崇禎十年が成書年代と推測できる。また、程允昇の同序文に「誠幼学之不可不知者。因題之曰『幼学須知』云」とある。即ち、先行する『幼学須知』との関係は不明ながら、程允昇『幼学須知』の書名は、程允昇なりの考えに基づいて名づけられたことが確認できる。

程允昇『幼学須知』の成書背景については、明の啓蒙教育の発達と啓蒙書の繁栄にも関わると考えられる。当時は宋、元代によく用いられた『三字経』や『千字文』等の啓蒙書のほかに、新たに編纂される啓蒙書も多く現れた。その内容の種類から見れば、道德類、礼儀類、韻律類、典故類、名物類等甚だ豊富である。たとえば、礼儀類では、方孝孺『幼儀雜箴』があり、韻律類は蘭茂『声律発蒙』、典故類は蕭良有『蒙養故事』、名物類は程允昇『幼学須知』が挙げられる。つまり、程允昇『幼学須知』は明の啓蒙書の輩出時代に成立した書の一つである。本書の成立後、鄒本『幼学故事瓊林』を含めて関連続書が次々と世に現れ、書名また撰者も多様である。次にその系譜の概要を別掲資料（本稿末尾）にまとめて見ていく。

3 程允昇『幼学須知』と鄒本『幼学故事瓊林』の系譜

別掲資料においては、前述の先行研究と筆者所見の文献に基づいて、鄒本『幼学故事瓊林』の系譜における主要な伝本の基本情報を挙げた。書名と編著者は、基本的に本文の首葉に依って表記した。略称は便宜のため私的に表記した。また、諸本における部立は、本文と目録で記載を異にする場合があるため、表では基本的に本文に見える部立に従った。別掲資料のように、程允昇『幼学須知』を祖本とする諸本は多い。諸本の詳細の特徴はまた別稿で検討するが、ここでは主に以下の点を指摘しておきたい。

○原本撰者の異説

別掲資料に見える系譜では、祖本として、程允昇による程本と、邱濬による邱本がある。但し、資料における程本と邱本の内容を確認するところ、両書は本文語句が基本的に一致し、主な相違は語注の有無にある。即ち、程本では本文語句、語注（本文語句に関する文義の注と出典引用など）、少数の音注があるが、邱本では語注がなく、少量の音注が新たに加えられたのみである。ここから見れば、邱本は程本から注文を省いた無注本、または素読本に相当するものともいえよう。

○書名の多様性

諸本の書名は多種にわたるが、『簡堂重訂幼学須知便読故事』、『寄傲山房塾課新增幼学故事瓊林』、『亦陶書室新增幼学故事群芳』、『精註雅俗故事読本』、『新鐫詳解丘瓊山故事必読成語考』等のように、「故事」という語が入るものが多い。このことから、故事の採録が重視されていることが窺える。

○部立

諸本は伝統類書の分類の体裁を有し、部立は基本的に三十三部になっている。但し、錢本のように三十四部のものもある。

○鄒本の流行

程本の増補本である鄒本は、のちに校注本、重増本、白話註解本、訓点本等の続本を輩出した。つまり、程本の続本として、鄒本『幼学故事瓊林』は最も流布したものとみえる。

4 鄒本『幼学故事瓊林』の成立

別掲資料に見えるように、程本を祖本とする鄒本『幼学故事瓊林』は、その成立・刊行の際の書名は、祖本をそのまま受け継ぐものではなく、「寄傲山房」の名を冠するほか、「新增」「瓊林」の語を付け加えている。

本書の成立の経緯については鄒聖脈の序文に見える。その序において鄒聖脈は、程允昇の「幼学」書を、当時の初学者の読書作文や士人の科挙受験に有効なものとして評価すると同時に、世間に流布する程本の伝本の不備が初学者の学習を妨害する点を指摘している。そして、自ら程本の内容を校定し、旧注を更新し、さらに群書から有益なものを抜粋して増訂を加えたという。加えて藍田の美玉のように人々に愛されることを期待して、その名を「瓊林」と名付けたと述べている^①。即ち、程允昇の「幼学」書は、鄒聖脈の増補と校訂によって初めて『幼学瓊林』という名を得ることとなった。

鄒本『幼学故事瓊林』は、祖本の三十三の部立を踏襲しており、中国の伝統文化における天文、地理、人事、制度、器物、花木等各方面の肝要な知識、典故を幅広く採録している。さらに本文は三六一聯（対句）の増補が見え、注釈の内容もより充実した。次に、この鄒本『幼学故事瓊林』が引く蔡琰の琴の故事を手がかりに、本書の故事引用のあり方、そして本書の部立の具体的な特徴について考える。

二 鄒本『幼学故事瓊林』が引く蔡琰の琴の故事について

蔡琰の琴の故事に関する語句は、祖本には見えず、鄒本『幼学故事瓊林』において「蔡女詠吟、曾伝箏譜」と「聴弾琴而辨絶絃、無非性敏」という本文が検出できる。いずれも女子の部に分類、収録されている。ここでは、その本文の

一つ「聴弹琴而辨絶絃、無非性敏」を取り上げて、正史の史伝と他の類書等と照合しながら、鄒本の引用故事の出典また、本文に対する引用内容の特徴を見ていきたい。

○鄒本『幼学故事瓊林』卷二

(本文) 聴弹琴而辨絶絃、無非性敏。

(鄒聖脈注) ①『世説補』、蔡文姬、年六歳。蔡邕夜中鼓琴、絃絶。姬曰、第二絃。父復故断一絃以問之。姬言、第四絃。並不差謬。父曰、偶得之耳。②姬曰、季札觀樂、知興亡之国。師曠吹律、識南風之不競。由此觀之、何足不知。

この蔡琰の琴の故事については、『後漢書』の李賢注に「劉昭幼童伝曰、邕夜鼓琴、絃絶。琰曰、第二絃。邕曰、偶得之耳。故断一絃問之。琰曰、第四絃。並不差謬」とあるように、出典は劉昭の『幼童伝』によるものと考えられる。但し、②は『後漢書』の李賢注には見当たらず、『芸文類聚』卷四十四樂部・琴類、「蒙求」「蔡琰辨琴」条、そして鄒本『幼学故事瓊林』に引く①『世説補』卷十五の術解部に関連内容が収録されている。

まず、①『世説補』については、現存する早期の刊本として、明の万曆十三年(一五八五)序刻の『世説新語補』が挙げられる。ここにおいても前述の蔡琰と琴の話が確認できる。『世説新語補』における明の王世貞「世説新語補序」によれば、この『世説補』は王世貞が劉孝標の注した劉義慶『世説新語』と明の何良俊『何氏語林』とを併せて取捨刪定したものである。つまり、鄒本『幼学故事瓊林』は、身近な時代の明に成立した書を参考書の一つとする。

そして、注目すべきは②の内容である。②は、父親蔡邕の琴の絃が切れたことをなぜ正しく理解できたのか、蔡琰がその理由を答えた内容である。蔡琰の回答には春秋時代の「季札」と「師曠」両者の故事が見える。音楽に通じた季札と師曠はいずれも異なる国の音楽を聞いて政治の良否や国の存亡を察することができたという。このように、『世説補』には『後漢書』に見えない音楽と政治を絡めた故事も網羅的に採録されている。

『世説補』の性格については、前述した王世貞の刪定本『世説新語補』の前身である明の何良俊『何氏語林』の成書に辿りうる。『何氏語林』は『世説新語』の続撰書として、明の『世説新語』の普及に欠かせない書であった。その

成書の社会背景としては、明中後期の陽明学の勃興と文学の復古運動の展開が関わっていると考えられる。当時、学風・士風の変遷には、漢唐時代の典籍が重視され、魏晋のような名士の気風が敬慕された。一方、明の嘉靖十四年（二五三五）、袁宏の『世説新語』の重刻により、『世説新語』も大きく広がった。明の何良俊はこのような背景のもと『世説新語』を模倣し、士人の言行の見本とすべく古今人物の逸事逸聞を集めたという。¹⁷『何氏語林』の逸話の収録範囲は漢代から明にほど近い元代にまで及んでおり、内容の網羅性と時代の縦貫性が見える。そうした点は王世貞に重視されて、『何氏語林』は『世説新語補』刪定本の前身として欠かせない存在になった。

鄒本が引用した『世説補』は四箇所確認できる。鄒本の引用文献の記載は經史子集にわたっており、正史の引用も少くない。『後漢書』の引用は五箇所確認できる。前述の鄒本『幼学故事瓊林』における蔡琰の琴の故事の引用において、『後漢書』ではなく、より網羅的に蔡琰の琴の故事が収録されている『世説補』を出典とするところに、編纂者の視野の広さも窺えるだろう。

一方、この『世説補』は明の直前までの名士の思想や言行に関わる内容を収録しているため、時世に応じた士人の言行の教科書的存在とも考えられる。鄒本『幼学故事瓊林』は初学者向けの書物であり、前述の鄒聖脈の序文に見える通り、科挙受験に資する一般士人の読み物でもあった。一般士人の基礎教養の模範ともなりうるよう、古今士人の重要な言行事蹟が収録されている『世説補』の内容を取り入れたことは、適切な編集姿勢であったと見なしえよう。

要するに、鄒本『幼学故事瓊林』における蔡琰の琴の故事の引用例から見れば、編纂者は本文語句に応じて、必ずしも正史の史伝にこだわらず、広く故事を網羅する最新文献をも利用して、人口に膾炙する重要な故事を適切に収録していることが分かる。このような特質は本書の編纂の際に目的とした、「詳所当詳、而不厭其繁。略所当略、而不嫌其簡。務帰明晰、一閱了然¹⁸」という趣旨と合致し、その注釈引用の内容は「博」と「要」を兼ねているということもできよう。「博」は内容の網羅性、また広く通じること、「要」は簡要さ、簡潔さ、要領を得ていることを指すと考えられる。このような「博」と「要」は、伝統類書の成書に重要な理念であり（後述）、鄒本のテキストの大きな特質として、とくに

注目に値するところである。

三 鄒本『幼学故事瓊林』における音楽故事の収録について

鄒本『幼学故事瓊林』では、上記の蔡琰の琴の故事の他にも、人口に膾炙する音楽故事を検出することができる。ところが、本書には、音楽（楽）等の部立は見当たらない。以下、他の類書と対比しながら、その部立の特徴を確認しておきたい。

音楽の部立については、早いものとして類書の遠源である字書『爾雅』の「釈楽」を先例として挙げる事ができる。その後、正統の類書では、隋の『北堂書抄』、唐の『初学記』や『芸文類聚』、宋の『太平御覧』等では、「楽」類を設けることが一般的になっている。また、楽の類の下にさらに細目をも備えている。たとえば、構成も内容も類書の模範とされた『芸文類聚』の楽部は、「論楽、楽府、舞、歌、琴、箏、篳篥、箏、笛、笙、箫、篪、篴、篥、篪、篴、篥、篪、篴、篥、篪、篴、篥、篪、篴」の細目からなっている。勅撰の大型類書だけではなく、鄒本『幼学故事瓊林』の序に取り上げられている私撰の類書『類林新詠』、『広事類賦』のような賦の文体の類書にも、音楽類の部立が立てられ、さらにその下に細目も付されている。たとえば、『広事類賦』巻二七の音楽部には、「鐘、磬、瑟、琵琶、簫、笙、笙、箏、箏」という細目が見える。

次は、同じ音楽故事を採録している賦体の『類林新詠』と、細目の整っている類書『太平御覧』を取り上げて、鄒本『幼学故事瓊林』の部立の特徴について検討したい。

表一^①のように、鄒本『幼学故事瓊林』に収録される音楽故事の八例は、その部立は、花木、婚姻、老寿幼誕、女子、朋友賓主、器用、兄弟の七つの部に分布している。そして、この八例の音楽故事のうち七例の故事が『類林新詠』に見えるが、ここでは音楽部の琴、簫という細目に収録されている。

これに対して、『太平御覧』においては、八例の音楽故事は、楽部の琴、簫、篪の細目に収録されているが、楽部以外の部立に重複して収録されている場合もある。①番の「尼父試弹琴、発泗水壇前之杏」という条はその例である。①

表一 鄒本『幼学故事瓊林』が引く音楽故事の部立と伝統類書との対比

/	鄒本『幼学故事瓊林』		『類林新詠』		『太平御覧』	
	見出し語句	部立	見出し語句	部立・子目	見出し語句なし	
					部立・子目	
①	尼父試弹琴、發泗水壇前之杏(増)	花木	緇林伴簡編	音楽部・琴	楽部・琴	学部・読誦。果部・杏。居処部・壇。地部・林。
②	風流蕭史、秦楼吹徹瓊簫(増)	婚姻	秦女鶴長隨	音楽部・簫	楽部・簫	皇親部・公主。羽族部・鳳。居処部・台。人事部・美婦人。道部・天仙。
③	榮啓期能抃襟懷、行歌樂士(増)	老寿幼誕	抱舞樂編躑	音楽部・琴	楽部・琴	人事部・敘人。人事部・寿老。人事部・樂。
④	聰弹琴而辨絶絃、無非性敏(増)	女子	断絃奇女慧	音楽部・琴	楽部・琴	人事部・強記。宗親部・女。
⑤	伯牙絶絃失子期、更無知音之輩	朋友賓主	誰參流水志	音楽部・琴	楽部・琴	人事部・交友。
⑥	何謂籟、有声之謂	器用	難比天公籟	音楽部・簫	楽部・簫	/
⑦	玉參差乃是簫名	器用	鳳翼響參差	音楽部・簫	楽部・簫	/
⑧	伯壘仲篋、謂声氣之相應	兄弟	/	/	楽部・篋	宗親部・兄弟。

番の故事は、『莊子』「漁父」の篇首における「孔子遊乎緇帷之林、休坐平杏壇之上。弟子讀書、孔子絃歌鼓琴、奏曲未半^⑦」という、孔子が杏壇で琴を弾き、弟子らが読書するような話である。鄒本『幼学故事瓊林』では、この故事は「花木」の部に収録されている。『太平御覧』では鄒本『幼学故事瓊林』の「花木」部に近い門類「果部・杏」に収録されているが、そのほか、「楽部・琴」、「学部・読誦」、「居処部・壇」、「地部・林」の四つの細目にも同時に収録されている。前節の蔡琰の琴の故事も例に挙げるとすれば、当該故事④番においても、鄒本では「女子」の部に収録されているが、『太平御覧』では、「楽部・琴」、「人事部・強記」、「宗親部・女」という三つの項目に収められているのである。

このように、同じ故事に対して、類書によって収録する部立の差異が見られる。それはいうまでもなくそれぞれの編纂の目的や体例等によるものだと考えられる。大型類書『太平御覧』は前代の『修文殿御覧』、『芸文類聚』等を参照して成った浩瀚な文献の集成であり、皇帝の遍覧の便に供することが編纂の目的の一つとなっている。体例としては見出しの語句がなく、部立・子目が細かく立てられていた。

一方、鄒本『幼学故事瓊林』の場合、体例として本文語句が見出しとして付けられている。その部立は伝統類書のかたちを取っているが、三十三部のみで細目はない。その発想には、鄒本『幼学故事瓊林』の序文には触れられていない。但し、その祖本「幼学須知序」に関連すると

思われる記載があるため、挙げてみよう。

○程允昇「幼学須知序」

……今世恒言、欲言我之所言、不若言古人之所言者之為雋。近世有心人彙古以行世者、若白眉、若黃眉、若書言、若類聚、若事類、若世説、若人物考、若故事鏡等種、非不別類分門、足供攷核、乃有讀過懵然。……惟是拋擲正業者數月、遍閱子史經傳、併羅諸家故事、摘其至要者、分為三十三類。

右の序文では、傍線で示しているように、祖本の程本は学習者の檢索・確認と記憶の便のため、従来の浩繁な典籍の諸書から重要な記事を三十三類にまとめて編纂したというのである。

三十三門の部立は、同じ賦体の『類林新詠』（二十二部、二三三子目）と比べても、非常に簡要になっているが、実際に採録する故事の範囲は幅広い。前述の音楽故事の例では、鄭本『幼学故事瓊林』には音楽類が立てられていないものの、広く知れわたる音楽故事が適宜に採録され、本書の各部立の中に溶け込ませる編纂を行なっていることがわかる。この点から見ると、本書の祖本の編纂の段階からすでに部立における「博」・「要」について工夫のあったことが窺える。つぎに、祖本の程本『幼学須知』から鄭本『幼学故事瓊林』への部立の継承関係について、同じく乾隆時期に成書した錢本『育正堂重訂幼学須知句解』と対比しつつ見てみよう。

○程本『幼学須知』 崇禎十年（一六三七） 程允昇序、不分卷、部立・三十三

天文・地輿・歳時・朝廷・文臣・武職・祖孫父子・兄弟・夫婦・叔姪・師生・朋友賓主・婚姻・女子・外戚・老寿幼誕・身体・宮室・器用・花木・鳥獸・衣服・飲食・珍宝・制作・文事・科第・釈道鬼神・技芸・訟獄・貧富・人事・疾病死喪

○鄭本『幼学故事瓊林』 乾隆二十五年（一七六〇）、鄒聖脈序、四卷、部立・三十三

卷一 天文・地輿・歳時・朝廷・文臣・武職

卷二 祖孫父子・兄弟・夫婦・叔姪・師生・朋友賓主・婚姻

女子・外戚・老寿幼誕・身体・衣服

卷三 人事・飲食・宮室・器用・珍宝・貧富・疾病死喪

卷四 文事・科第・制作・技芸・訟獄・釈道鬼神・鳥獸・花木

○錢本『育正堂重訂幼学須知句解』乾隆二十二年（二七五七）錢元龍序、四卷、部立・三十四

卷一 天文・地輿・時序・統系・朝廷・相獸

卷二 將略・科第・文階・武秩・父子（祖孫類附）・兄弟（叔姪類附）・夫婦・師友（賓主類附）・婚姻・外戚

卷三 列女・人事・年齒（寿誕類附）・制作・文史・芸術・貧富・訟獄・凶喪

卷四 釈道（鬼神類附）・身体・宮室・器用・衣飾・飲食・珍宝・花木（蔬果穀実類附）・鳥獸（虫魚類附）

右のように、鄒本では、「衣服」以後の部立の配列順は多少調整してあるが、二重傍線の「天文」から「身体」までの部立の名称と配列は基本的に程本と同じである。それに対して、同じく乾隆時に成書した錢本では、二重傍線の「天文」「地輿」の部立以外は、波線の「統系」や「相獸」等のように配列順から部立の名称まで異なるところが多い。また、総部立数も三十三から三十四に増加している。成書時期の近い錢本と比べて見ると、鄒本は程本を比較的忠実に継承していることが分かる。

鄒本『幼学故事瓊林』の編纂の際には、全体的に祖本の注釈を充実させ、三六一聯を増補して、巻数も四巻までに増えたが、祖本の立てた三十三部の門類の簡要さは、追加等なく基本的にそのまま踏襲したのである。

四 鄒本『幼学故事瓊林』の部立の全体構成と世界観

以上、鄒本『幼学故事瓊林』が祖本の三十三の部立を継承したことを見てきた。以下、そもそもこの三十三の部立の全体構成はどうなっているのか、またその分類はどのような理念を表しているのかについて見ていく。

分類といっても、文献によって様々な分類方法がある。たとえば、前述の程允昇「幼学須知序」に取り上げた逸話集

表二 鄒本『幼学故事瓊林』の部立の構成と伝統類書などとの対比

天・地・人・物	天・地・時	人	博物(文物・制度等)
世説新語 三十六部	/	徳行・言語・政事・文学・方正・雅量・識鑑・賞誉・品藻・規箴・捷悟・夙惠・豪爽・容止・自新・企羨・傷逝・棲逸・賢媛・術解・巧芸・寵礼・任誕・簡傲・排調・怪誕・假譎・黜免・儉嗇・汰侈・忿狷・讒險・尤悔・紕漏・惑溺・仇隙	/
黄眉故事 三十二部	乾象・坤輿・歲時	帝統・官品・人品・倫道・女子・身体・美德・劣性・人事	芸術・異教・吉礼・凶礼・仕進・居室・器用・衣服・文史・宝貨・飲饌・衆花・衆木・果実・百草・翼禽・蹄獸・畜産・水族・昆虫
芸文類聚 四十七部	天・歳時・地・州・郡・山・水・符命	帝王・后妃・儲宮・人・職官・封爵	礼・楽・治政・刑法・雜文・武・軍器・居処・産業・衣冠・儀飾・服飾・舟車・食物・雜器物・巧芸・方術・内典・靈異・火・薬香草・草・宝玉・百穀・布帛・果・木・鳥・獸・鱗介・虫豸・祥瑞・災異
鄒本「幼学故事瓊林」 三十三部	天文・地輿・歳時	朝廷・文臣・武職・祖孫父子・兄弟・夫婦・叔姪・師生・朋友賓主・婚姻・女子・外戚・老寿幼誕・疾病死喪・貧富・身体・人事	衣服・飲食・宮室・器用・珍宝・文事・科第・制作・技芸・訟獄・釈道鬼神・鳥獸・花木

『世説新語』の部立のように、徳行、言語等、人物の品評を主とする分類もあれば、また伝統の正統的類書『芸文類聚』のような万物を含む総合的な分類方法もある。

祖本『幼学須知』の編纂者は『世説新語』のような分類のしかたをとらずに、総合的な類書『芸文類聚』のかたちを採用した。この総合的な類書の目立つ特徴は、天地(時)を首とし、続いて人、それから経済、制度、動物、草木等の万物を配置していることにある。つまり、天、地、人、物という万物を包含する系統性が見える分類である。具体的にどのような構造になっているか、以下はこの天地、人、博物等の万物の枠で各書の部立を対比してみよう。表二は鄒本『幼学故事瓊林』と、その祖本の序に触れた『世説新語』、『黄眉故事』、及び総合的類書の『芸文類聚』における部立の全体を上げている²⁸⁾。

表二のように、鄒本「幼学故事瓊林」の部立の全体像は、『世説新語』のように人の枠ではなく、『黄眉故事』と総合的な類書『芸文類聚』に近い構成になっている。即ち、天、地、人、博物等(万物)という当時の人々が考える宇宙の諸要素を分類して構成している。ここから見れば、鄒本「幼学故事瓊林」では、童蒙や初学者を対象とする読物でありながら、単なる物事や基礎知識を覚える便だけではなく、系統的世界観の構築も重

視されていたといえよう。

ところが、このような天、地、人、万物の全体を觀察して分類し、広大な世界を系統的に把握するような觀念は、当然編纂者の独創によるものではない。その思想の根底を追究すると、古く『周易』にまでも遡ることができるだろう。たとえば、『周易』における八卦の制作の経緯の解説には、「古者包犧氏之王天下也。仰則觀象於天、俯則觀法於地。觀鳥獸之文、与地之宜。近取諸身、遠取諸物。於是始作八卦、以通神明之德。以類万物之情。……易之為書也、廣大悉備。有天道焉、有人道焉、有地道焉。兼三材而兩之、故六^⑤」とあるように、世界の万物を認識の対象として網羅的に整理し、天地人の三才を系統的に位置付けるような思想が端的に現れている。このような伝統的な世界觀は正統的類書の成立を支える思想的基盤であり、鄒本『幼学故事瓊林』における部立の背景にも、同じくこの伝統的な世界觀が存在するといえよう。^⑥

五 鄒本『幼学故事瓊林』における「博」と「要」について

前述のように、鄒本『幼学故事瓊林』の部立は三十三しかないが、全体の構造においては、万物を網羅してその肝要な部分を纏めるような世界觀が存在する。則ち、本稿に取り上げた蔡琰の琴の故事の引用に止まらず、本書の全体の部立の構成の面でも、「博」と「要」の理念が示されているともいえる。

この「博」と「要」については、鄒本『幼学故事瓊林』の類書的な特質として欠かせないものであり、中国の正統類書の成書に存在している中核的な理念、たとも考えられる。たとえば、正統類書の起点としている『皇覽』を模範として編纂した北斉の類書『修文殿御覽』の成立には、「晋魏文帝命韋誕諸人撰著皇覽、包括群言、区分義別。陛下聽覽余日、眷言細素、究蘭台之籍、窮策府之文、以為觀書貴博、博而貴要、省日兼功、期於易簡^⑦」とあるように、初期の正統類書の成書においては、皇帝が群書を閲覽する際の能率を上げるために、「博」と「要」に工夫が必要なのが意識されているため、その成立も可能になった。

また、宋の王心麟の『玉海』芸文部の「承詔撰述・類書」条においても、「学古貴乎博、患其不精。記事貴乎要、患其不備。古昔所專、必憑簡策。綜貫群典、約為成書⁷⁾」とあり、類書の成書における「博」と「要」の兼備という中核的理念が指摘されている。即ち、このような基本理念は、皇帝御覧用の正統な大型類書の成立にとどまらず、一般類書のかたちを備えている鄒本「幼学故事瓊林」のテキストにもよく反映されているのである。

この「博」と「要」のポイントについては、前述の鄒本『幼学故事瓊林』の本文の出典引用や部立の構成から既に検討したが、実は鄒本『幼学故事瓊林』本文内容以外の付録においても同じような編纂意識が窺える。付録は、諸本にもよくある部分である。載せる項目の相違も存在するが、主要な項目は歴代国統や往来尺牘等の時世に応じるものが多い。例えば、程本『幼学須知』では、歴代国統、昭代世統歌、昭代聖諱等の付録がある。鄒本『幼学故事瓊林』の場合、その巻首に天文図、地輿図、河図、洛書、五岳図等がある。さらに本文の上欄に書信便覧、歴代帝王総紀、交接称呼、物類別名、応酬佳話、往来尺牘等が収録されており、簡潔的な説明も付してある。鄒本『幼学故事瓊林』の付録の細かな考察は、今後の課題とするが、ここでは、鄒本に見える、本稿に関わる「物類別名」における音楽類の項目を取り上げて確認してみよう。

鄒本『幼学故事瓊林』卷三の上欄に載せている「物類別名」では、「穀食類、果品類、肴饌類、蔬菜類、茶酒類、冠服類、珍宝類、文具類、音楽類、禽獸類、花木類、器用類（閨門附）」の十二類の門類がある。鄒本「幼学故事瓊林」の正文に見えない音楽類の部立はここで立てられている。また、この音楽類の細目では、「琴、瑟、箏、琵琶、月琴、三弦、提琴、箜篌、簫、管、笙、笛、鼓、鑼、磬、雲板」の十六種の楽器も挙げられており、種類は甚だ豊富である。解説は簡要さに特色がある。たとえば、「簫」の楽器について「簫曰鳳簫、其形参差不齊、如鳳之翼、故名」とあるように、簫の楽器の別名とその由来について簡潔に説明を加えている。そして、この「物類別名」の項目の内容の収録について、編纂者の「物類別名」序に「每見人家餽遺礼物開載柬中、多有不知此物別名。臆為杜撰、但務新奇者。……相沿習用、如酒曰魯酒、粽曰角黍之類、不解名義由来者。今特物物詳注、以便一覽了然。雖餽遺之小資、抑博通之末助也」とある。

このように、鄒本「幼学故事瓊林」の上欄における日常常識に相当する部分の付加説明においても、「二覽了然」の「簡要」と、広く物事に通じる「博通」に重点をおく編纂姿勢が窺える。鄒本「幼学故事瓊林」は、その部立の構成及び本文における故事の引用から付加内容に至るまで、「博」「要」兼備の志向で一貫しているともいえるだろう。

おわりに

本稿では、主に蔡琰の琴の故事の引用を手がかりに鄒本『幼学故事瓊林』に見える音楽故事を検討し、本書の編纂姿勢と類書性格を考察した。とりわけ、部立に見える伝統的な世界観の重視という特徴、また「博」と「要」に重点を置く編纂の工夫が、伝統類書の体裁や編纂のあり方の背景にある思想と共通している点が見えてきた。

鄒本『幼学故事瓊林』は、伝統的類書の性格を兼ねていると同時に、その中心となる読者は基本的に童蒙や初学者であるため、たとえば同時代の啓蒙書である蕭良有『蒙養故事』(『龍文鞭影』)等の内容や体裁と比べてどのような特徴があるのかも考察すべきである。とくに本書は、唐の李翰『蒙求』より発展してきた掌故類(典故や故事類)啓蒙書とも言われる。そのため、今後は、鄒本『幼学故事瓊林』と『蒙求』等、他の啓蒙書との継承関係を検討する必要がある。また、鄒本『幼学故事瓊林』は清初に成立してのち、中国での流布に止まらず、明治十八年(一八八五)には、日本の漢学者、草場金台による訓点本の刊行も行われた。このことも含めて、日本における受容についても今後の課題としたい。

注

(1) 葉玉麟増撰『再増国語注解幼学故事瓊林』(広益書局、一九三三年)。

(2) 程登吉原編、鄒聖脈増補、胡遐之点校『幼学瓊林』(伝統蒙学叢書、岳麓書社、一九八六年)、馮国超訳注『幼学瓊林』

鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』の類書性格について―蔡琰の琴の故事の引用から―

- (4) 国学経典規範読本、商務印書館、二〇一八年) 参照。
- (5) 前掲注(2) 胡遐之点校本『幼学瓊林』 喻岳衡前言、一〇頁参照。
- (6) 王丹『幼学瓊林』研究(東北師範大学、修士論文、二〇一六年) 参照。
- (7) 本書の成立後、関連の校注、再増等の続本が輩出し、諸続本の編纂趣旨等によつて本文の内容、注釈等も変貌しつつけている。本稿では、鄒聖脈増補本の原書のテキストを用い、その特徴の一端を検討するため、書名の表記における鄒聖脈増補本『幼学故事瓊林』は、『寄傲山房塾課新增幼学故事瓊林』の原書を指すことにしている。但し、伝本の区別を言及する必要がない場合、『幼学瓊林』を通称として使用する。底本については、鄒聖脈増補本は、清の李光明荘の『寄傲山房塾課新增幼学故事瓊林』、乾隆二十五年(二七六〇) 序刊本(天津図書館蔵)を使用する。程允昇の祖本は、楊小閩梓行『簡堂重訂幼学須知便説故事』、明崇禎十年(一六三七) 序刊本(慶応大学蔵)を用いる。以下は、便宜のため、鄒聖脈増補本を鄒本、程允昇の祖本を程本とも略称する。また、引用文における句読点、番号、傍線は基本的に筆者によるものであり、漢字の表記は常用漢字体を基本とした。
- (8) 程允昇の事蹟は、清の雷学淦『新建県志』卷四十一「人紀遺才」(道光十年(一八三〇) 刻本、六頁) に見える。
- (9) 鄒聖脈の基本情報は謝江飛『四堡遺珍』第十二章「蒙学大家鄒聖脈考論」(廈門大学出版社、二〇一四年、二七四～二八六頁) に詳しい。
- (10) 李莉『幼学瓊林』作者、成書及版本考(山東大学、修士論文、二〇一七年) 参照。
- (11) 陳振孫『直齋書録解題』卷十四(台北・広文書局、一九六八年)、八九一頁。
- (12) 楊士奇ら編『文淵閣書目』卷十一(台北・広文書局、一九六九年)、四八〇頁。
- (13) 葉盛『棗竹堂書目』卷五(王雲五主編『叢書集成簡編』、台湾商務印書館、一九六五年)、九八頁。
- (14) 張九韶『群書拾唾』序(長沢規矩也編『和刻本類書集成』第四輯、汲古書院、一九七七年)、五頁。
- (15) 馬冠男「明代蒙学教材、教法研究」(揚州大学、修士論文、二〇〇七年) 参照。

(14) 原文は「欣逢至治、擢取鴻才、時芸之外、兼命賦詩。使非典籍先悉於胸中、未有揮毫不窘於腕下者。然華子之類賦、姚氏之類林、卷秩浩繁、艱於記憶。惟程允昇先生幼學一書、誠多士饋貧之糧、而制科度津之筏也。但碎金積玉、原屬無多、則摘鹽熏香、応増未補、庶幾文人足供驅使。奈坊刻所補殊不雅馴。在老成能知去取、固諒統貂。若初學未識從違、反云全璧。一絳習染、俗不可医、即用針砭、難痊痼疾矣。爰採彙書、各増編末。文必絶佳、片箋片玉。語期可誦、一字一縑。並汰旧註之支離、易新詮之確当。詳所当詳、而不厭其繁。略所当略、而不嫌其簡。務歸明晰、一閱了然。如藍田之琬琰、元圃之琳琅。能令見者宝之、各欲私爲枕秘。因顔之曰瓊林。覽是書者、其以余言爲不謬否」(乾隆二十五年、鄒聖脈序。前掲注(5)李光明荏本による)。

(15) 『後漢書』卷八四・列女伝(中華書局、一九七三年)、二八〇〇頁を参照。

(16) 劉義慶撰、何良俊増、王世貞批釈、張文柱校注『世說新語補』卷十五(明万曆十三年(一五八五)刊本参照)。

(17) 翟勇『何氏語林』成書考論(西華師範大学学報・哲学社会科学版、二〇一〇年第一期)を参照。何良俊『何氏語林』の撰述の志しは前掲注(16)万曆十三年刊本における陸師道「何氏語林旧序」にも見える。

(18) この編纂趣旨は前掲注(14)の鄒本の序文に示している。

(19) 類書の起源については諸説があり、分類の形式から字書『爾雅』を類書の遠源とする見方がある(胡道静著『中国古代的類書』(中華書局、一九八二年)五〇八頁を参照)。

(20) 『類林新詠』は、三十六卷、清の姚之駟の撰。『広事類賦』は、四十卷、清の華希閔は宋の呉淑『事類賦』を増補したものである。『重訂広事類賦』、乾隆二十九年(一七六四)序刊本を参照。

(21) 表一は同じ音楽故事の引用例を取り上げている。表では、「見出し語句」は本文の語句を指す。「増」は、祖本に見えず、鄒本に増補された語句である。各類書は引用の際、書名等を省略した場合がよくあるため、表一には基本的に引用書が明記されている例に限られている。また、紙幅のため、表では引用書と引用原文の記入を割愛した。テキストは、前掲注(5)

鄒本の李光明荏本、前掲注(20)『類林新詠』康熙四十七年序刊本、李昉等撰『太平御覽』(中華書局、一九六三年)に基づく。

(22) 郭慶藩撰、王孝魚点校『莊子集釈』「雜篇・漁父」(新編諸子集成、中華書局、一九八五年)、一〇二三頁を参照。

(23) テキストは、劉義慶撰、梁劉孝標注『世說新語』(中華書局、一九九九年)、鄧志謨撰『精選黃眉故事』(三槐堂藏版、清刊本)、

歐陽詢撰『宋本文類聚』(上海古籍出版社、二〇一三年)、前掲注(5) 鄒本の李光明荏本に基づく。

(24) 孔穎達疏『周易正義』繫辭下(阮元校刻『十三經註疏』、中華書局影印本、一九八二年)、八六、九十頁を参照。

(25) 『周易』から伝統類書の成立の思想的基盤が窺えることについては、湯淺邦弘「類書の成立」(加地伸行『類書の総合的研究』、文部省科学研究費補助金研究成果報告書、一九九四〜一九九五年)にも指摘されている。また『幼学瓊林』の性格については、甲斐勝二・東英寿「中国文化知識の基礎研究其一一 伝統童蒙教育課本『幼学瓊林』初探―上(『幼学瓊林』の諸問題)」(福岡大学総合研究所報、一九九〇年三月)では、『幼学瓊林』の分類、配列は、世界観が反映されている伝統類書の簡略版の立場に立つことを示すとも主張している。

(26) 丘悦『三国典略』による(前掲注(21)『太平御覽』卷六〇二、二七〇六頁)。

(27) 王心麟『玉海』卷五四(合璧本、台北・大化書局、一九七七年)、一〇七四頁。

(付録) 本稿は、二〇二三年七月、和漢比較文学会第一五五回例会・東部(オンライン)での口頭発表に大幅加筆・修正したものである。口頭発表の際、また稿を成すにあたって、ご教示を賜った諸先生方に、厚く御礼を申し上げます。

別掲資料 鄒本『幼学故事瓊林』と祖本の系譜

略称	書名	編著者	巻	序・跋	筋立	付録
程本	簡堂重訂幼学须知 便説故事	西昌程登吉允昇甫著。	不分巻	崇禎十年(一六三七年)程登吉序。	三十三	〇
唐本	新刻幼学须知直解	西昌程登吉允昇甫著。西昌呂良諭李美甫、唐良瑚參之集註。	二巻	歲在甲戌清和、静樂藥堂主人識。	三十三	無
錢本	育正堂重訂幼学须知句解	京江錢元龍字山甫校梓。	四巻	乾隆二十二年(一七五七)錢元龍序。范承宣序。	三十四	〇
周本	亦陶書室新增幼学故事詳考	西昌程允昇先生原本。關訂周達用增訂。	四巻・ 昔一巻	乾隆四十三年(一七七八)章氏序。	三十三	〇
周本	精註雅俗故事説本	明西昌程允昇先生原本。清關訂周達用增補加註。日本東肥平岡龍城原訂。	二巻	大正六年(一九一七)平岡龍城序。	三十三	〇
周本	新校本	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。	四巻・ 昔一巻	乾隆二十五年(一七六〇)鄒聖脈序。	三十三	〇
鄒本	寄傲山房塾課新增幼学故事瓊林	清溪謝梅林視庸氏。男鄒可庭步園同參訂。慈源董成瀛峰註。受業古欽 韓步瀛仙洲 吳承枚瑋屏 仰士章詠白、仰宸淡如、仰士会醉白、方永清小雲 呂庚不登、男鳴鳳旭同同訂。	三十三 巻・編	道光二十一年(一八四一)蕙其仁序。道光二十二年(一八四二)董成識。	三十三	無
鄒本	寄傲山房塾課新增幼学求源	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。清溪謝梅林視庸氏。男鄒可庭步園參訂。古越蔡越東 潘統禮、山陰石鑑玉乘補重校。	四巻・ 昔一巻	民国八年(一九一九)古越蔡成東潘氏識。	三十三	〇
鄒本	會文堂精校重増絵図幼学故事瓊林	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。吳興費宏管復、杭州沈應先校。	四巻	乾隆二十五年(一七六〇)鄒聖脈原序。民国十二年(一九二二)費有登敘。	三十三	無
鄒本	新增幼学瓊林白話註解	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。清溪謝梅林視庸氏。男鄒可庭步園參訂。桐城葉玉麟 潘基邦題、山陰石鑑玉乘補重校。	四巻・ 昔一巻	民國二十二年(一九三三)朱雅公序。	三十三	〇
鄒本	再增國語註解幼学故事瓊林	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。清溪謝梅林視庸氏。男鄒可庭步園參訂。桐城葉玉麟 潘基邦題、山陰石鑑玉乘補重校。	四巻・ 昔一巻	乾隆二十五年(一七六〇)鄒聖脈原序。明治十八年(一七八五)草場勲山序、草場金台序。	三十三	〇
鄒本	寄傲山房塾課新增幼学故事瓊林	西昌程允昇先生原本。霧閣鄒聖脈衍嗣氏增補。清溪謝梅林視庸氏。男鄒可庭步園參訂。日本草場勲題、男諷訓点。	四巻・ 昔一巻	序跋、無。咸豐六年(一八五六)新編。	三十三	無
鄒本	鄒本・無註本	内閣邱文莊公原本。	二巻		三十三	無
鄒本	訓点本・中島本	雲間盧元昌文字補著。	二巻	天和元年(一六八一)荒川秀題。天和二年(一六八二)中島義方跋。	三十三	無
鄒本	集註本・三宅本	明丘瓊山故事必説成語考集註	二巻	寛政元年(一七八九)三宅元信序。寛政三年(一七九一)永忠原序。	三十三	無
鄒本	和訳本・六戸本	故事成語考註解	不分巻	明治三十五年(一九〇二)源春信識。	三十三	無

鄒聖脈增補本『幼学故事瓊林』の類書的性格について—蔡琰の琴の故事の引用から—